

## 第36回「東書教育賞」の 審査を終えて

審査委員長 市川 伸一



本年度は、コロナ禍の厳しい状況にありながら、東書教育賞に多くの応募をいただいたことを、審査委員一同、まことにありがたいことと思っております。

応募論文の全体的特徴としては、昨年度に引き続き、学習指導要領の移行期であることから、「主体的・対話的で深い学び」、とくに「主体的」に焦点を当てた教育実践が多く見られました。また、「社会に開かれた教育課程」として地域との連携を目指した実践や、「教科等横断的な資質・能力の育成」として、教科や総合がクロスするような実践も目立ちました。

素晴らしい論文が多数ある中、私からは、最優秀となった2論文につき、紹介をさせていただきます。

「小学校の部」では、沖縄県南城市立大里北小学校教諭の儀間奏子先生の「コロナ禍を乗り越える平和学習の創造を目指して」が受賞されました。4年生を対象に、道徳と国語科にまたがる実践です。

儀間先生は、平和学習のための教材として、自ら子供向けの紙芝居を作りました。その中には、コロナ禍で学校にも行けずつらい毎日を通り越す主人公と妹が登場します。しかし、彼女らの母親は、沖縄でもっとつらい体験をした75年前の「きくさん」の絵本を読み聞かせます。さらに、沖縄の人々がつらかったのは戦時中だけでは

なく、戦後の復興のためにどれだけの苦労があったかを話します。そこで、認識を新たにする主人公と妹の姿が描かれていきます。

この紙芝居を教材とすることで、主人公と同じ年代の児童たちも共感し、沖縄について地域の人たちとも関わりながらその後の学習活動を進めていく様子が、論文には紹介されています。儀間先生は、教育の世界でいま、「コロナだから仕方がない」とよく言われるものの、むしろ「コロナだからその教育活動」を展開したかったと述べておられます。紙芝居という教材を工夫してじっくり作り上げることは、確かにコロナ禍で休校や分散登校を余儀なくされたために生じた時間を最大限に利用したものです。

この論文は、典型的な教育論文のスタイルというより、ドキュメンタリー風の実話を組み立てたストーリーのように書かれています。それについては、審査委員の間でも議論はありましたが、一般性や実証性というよりも、高いリアリティがあり、その卓越したアイデアと実践力は、大いに参考になるものであることが評価され、最優秀賞となった幸いです。

「中学校の部」では、静岡県浜松市立細江中学校校長の山田達夫先生による「探究的な学びを通して、次代を創る子供たちの資質・能力の育成」が最優秀賞となりました。3年生の総合的な学習の時間における実践です。学校と地域

とが連携協力した教育実践を校長先生がまとめた異色の論文と言えます。

本校では、全国学力調査の結果、「将来の夢や目標をもつ」、「地域や社会をよくするために考える」などが平均より低いという課題があったと言います。そこで、新学習指導要領で強調される探究的な学習と、社会に開かれた教育課程をからめた「ふるさとキャリア教育」を次のように構想して実践しています。

まず、「課題設定」では、地元企業、大学、自治体、商店会・商工会などの取り組みを聞き、それらを参考に自分たちで探究するテーマを考えます。「情報収集」では、地元新聞記者から取材するときのポイントを聞いてフィールドワークやインタビューを行います。「整理・分析」では、大学教授からのオンライン研修で、比較、分類、関連付けなどの思考ツールの使い方を学びます。最後に「まとめ・表現」として、「ホソ・フェス」という行事を開き、グループ別の研究発表や代表によるプレゼンを地域に公開しました。

プレゼンの内容としては、「災害に強い細江町にするために」という、調査や具体的提案、「若い人にみそまんを発信しよう」という、地元の名物「みそまん」をはじめ、細江町の自然や歴史などを紹介する提案が出されています。こうした取り組みの成果として、課題があった全国学力調査項目も大きく上昇し、地域の人たちからのアンケートでも、ふるさとをテーマにした探究学習に非常に高い評価が得られたということです。

最優秀となった二つの論文は、方向性や論文スタイルは異なるものの、社会の中での自分たちの役割や生き方そのものを考えさせる深い内容で、今後の我が国の教育に大きな指針となるものと言えるでしょう。東書教育賞としてこうした優れた教育論文を選出することができたことは、審査員一同、望外の喜びであり、実践のよりいっそうの発展を願い、私からのご挨拶とさせていただきます。

## ICTに関わる 論文の総評

審査委員 赤堀 侃司



ICT部門の審査をさせていただいた赤堀と申します。受賞者の皆さん、本当におめでとうございます。今回は、大変優れた論文が多くて、審査が難航しました。

最初は、小学校で特別優秀賞を受賞されまし

た、千葉県の子村校長先生です。この特別優秀賞という言葉に注目してください。こういう賞は、これまでございませんでした。ただあまりにも素晴らしいので、優秀賞の中の特別な賞であるという意味で、敬意を表して、この賞を贈らせてい

ただいております。

内容ですが、2020年に入って、急速な新型コロナウイルスの感染によって、世界中が大混乱に陥り、日本も3ヶ月間の休校を余儀なくされました。しかし山村校長先生をはじめ、教職員の皆さんが、なんとか休校中の子供たちに元気を与えていきたい、そのために教職員もICT、特にオンラインシステムについては、まったく不慣れだけれども、Zoomというソフトがあるのでこれを導入しよう、と考えられました。最初に実践したこと、それはZoomによるラジオ体操でした。これに感銘を受けました。子供たちは休校で体を動かしていない、生活リズムを取り戻さなければならない、友達同士のコミュニケーションができていない、先生の顔も見えていない、体を動かすことで元の学校の状態に引き戻そうではないか、という気持ちがよく表現されていました。これがきっかけで、次への発展に繋がっています。エジプトの住民とオンラインで国際交流を行ったり、東京に住んでおられるシンガーの方との交流をしたり、Zoomによる活動が次々に発展していったのです。

山村校長先生は、この実践は自分にとっては夢のようだ、ピンチをチャンスにすると、このことだと書かれており、私ども審査員は、この実践に拍手を送りたいという気持ちで、特別優秀賞にさせていただきました。

二点目は、小学校の千葉県の佐和校長先生の論文で、優秀賞を受賞されました。佐和先生は、ICT教育では大変著名な先生で、昔からこの分野で活躍されております。なんといっても、この論文の素晴らしさは、PDCAサイクルによる学力向上にあります。佐和先生が、学力調査の結果を見て、子供たちのつまずきは、毎年同じ内容であることに気付いた、ここがすごい。全国の多くの学校で同じような問題を抱えているはずです。佐和先生の論文の優れている点は、問題の原因をプランを立て実行してチェックをしアクションを起こすという、PDCAサイクルができてないことにあると考えたところにあります。

最初は算数の面積の計算で面積の計算ができ

ないのは、その大きさの感覚がつかめていない、そういう概念ができていないからだと分析したのです。そこで、授業改善に結びつけていくために、1人1台のパソコン環境の下で、実際に学力調査をして改善に結びつけていったのです。学力調査では、40%以上アップしたと報告されています。次は、図形の展開図ですが、これも手作業に時間が取られて、実際の学習ができていないと分析し、シミュレーションソフトを導入して実践した結果、17%の学力の向上が見られたという文字どおり、データに基づく実践をされたのです。教育論文らしい実践で、私どもも大変高く評価いたしました。

次は、中学校部門ですが、神奈川県相模原市教育センターの渡邊指導主事です。渡邊先生もプログラミング教育で大変著名で、各地の研修会や学会でも発表されております。相模原プログラミング教育カリキュラムと呼ばれていますが、その内容の報告です。どの学年で、どの教科で、どんな内容で、どんな配列で、という相模原モデルを提案して、そのカリキュラムが全国でもかなり受け入れられていると聞いております。優秀賞に値する実践で高く評価されました。

最後ですが、中学校の特別賞として、滋賀県の中西先生が受賞されました。中西先生は、東書教育賞の常連の先生と言ってもいいと思いますが、何と言ってもその実践が素晴らしいので、常連ではあるけれども今年も特別賞を差し上げたいと審査会で決まりました。中西先生の実践内容は毎年テーマが違っておりますが、今年は反転学習です。新型コロナウイルスの感染が続きますと、自宅での学習が余儀なくされます。そうするとYouTube等でアップロードされた動画教材による予習や学習が重要になるのですが、この論文は、その実践と評価です。中西先生には、いつまでも優れた実践を継続していただきたいと思えます。

以上が、ICT部門の今年の審査結果のコメントです。受賞者の皆さん、おめでとうございます。

審査委員

## 鳥飼 玖美子



2020年は、コロナ禍で学校現場は対応に追われましたが、そのような中でも実践に基づく論考が多く集まったことに感謝いたします。

その中で、小学校・優秀賞に決定した友永達也先生の『『訊く力』を重層的に育む一実の場で生きる対話能力を目指して―』では、国語科の指導において「対話」に着目し、「話すこと」と「聞くこと」は分断できないことから、「聞くこと」を主軸にした指導を試みています。

さらに、「聞く」という行為は相手のことばを全体として受け入れることであり、その上位には焦点を絞って理解しようとする「聴く」があり、最上位にはわからないことを問い返す「訊く」があり、相互補完的な階層性から成ることを前提に、5年生の授業で「訊く」ことの重層性を体得することを狙い「新聞取材のためのインタビュー」を取り入れています。児童は、それぞれが報道記者、写真記者、校閲記者の役割を担って紙面作りを追体験するだけでなく、神戸新聞元記者の講話を聞き、インタビューにおける質問方法などを学びます。「人の話をよく聞いて質問しなさい」と抽象的な指示では効果がありませんが、このような授業での実体験により、「相手の話を聞いて問う」という対話コミュニケーションの極意を自然に学ぶこととなります。

新聞作りの方法は国語科で学び、掲載内容は総合的な学習の時間で情報収集という科目横断的な指導であることも高く評価できます。

英語科の投稿論文は、これまで質量ともに課題がありましたが、2020年は、黄俐嘉先生の「地域を活かした言語活動～新学習指導要領と小中連携を踏まえて～」が中学校・奨励賞を受賞されたことを心から喜んでいます。

東京都世田谷区が、「世田谷9年教育」と名付けた義務教育9年間の連携を重視していること、ユニバーサルデザインのまちづくり、心のバリアフリーに取り組む自治体であることを存分に活かしつつ、検定教科書（NEW HORIZON ENGLISH 2、東京書籍）とつなげている英語科の授業実践です。

具体的には、Unit5 Universal Designと「Presentation2 町紹介」を使い、「ALTに紹介したい世田谷区内の場所」と区内で見られるユニバーサルデザインの発表を課題とし、そこへ向けて教科書本文再現活動を導入しています。教科書の英語を単に丸暗記させるのではなく、意味を考えて再現するという指導方法は見事です。さらに注目すべきは、既習の文法や単語で発表が可能なることを生徒たちに指導している点です。現実のコミュニケーションの場では、主張するために必要な単語や語句を全て知っているとは限りません。そのような状況でも諦めず何とか意図を伝える力が必須です。その現実を踏まえ、生徒たちが既習の文法や単語を駆使して相手に伝える方策を授業での体験を通して学ぶことは極めて重要です。

なお、小学校と中学校の接続は特に英語科の場合、喫緊の課題です。本論考の最後にあつたとおり、小中接続を図るための研究授業、児童の英語でのつまづきを把握するために小中教員で意見を交換して指導法の工夫を練ることは、是非とも充実させていただきたいと願います。

審査委員

## 武内 清



応募論文の審査に関わらせていただいた武内と申します。全体の感想と二つの論文の紹介をさせていただきます。

新型コロナ禍の中で、教育現場の先生方は、この1年いろいろなことで大変だったと思いますが、例年以上に優れた実践報告の応募が多かったと思います。

中学校で「優秀賞」を獲得された鷺辺章宏先生の「科学的に探究し、学ぶ意味や価値を実感できる理科教育の創造」は、授業の題材に身近にある岩石を扱い、科学の基本である仮説一検証の実験を行い、生徒の学びの成果や意識の変容をデータで確認しています。NHKの「列島誕生」番組の視聴、生徒同士の話し合い、実際の岩石の観察や実験を行い、それを普遍的な科学探求への興味に結びつけています。授業の進め方は生徒の疑問を取り入れつつ、それが科学的な比較や推論に向かうようなさまざまな工夫がされています。その結果、生徒が科学を学ぶ意味や価値を真に実感できたことが各種のデータ（アンケート、事後テスト、振り返り等）で示されています。理科教育の模範になる授業実践で、論文としても明快で読みやすく書かれていて模範となる優れたものです。

次に小学校で奨励賞を獲得された菊池康子先生の「しなやかに未来を生き抜くための力を育む音楽づくりの指導の工夫」について紹介します。音楽の授業で、二つの工夫をしています。一つは、

音楽の鑑賞や作曲に体を動かす活動を取り入れること。もう一つは即興的な表現エクササイズを取り入れることです。具体的には、現代音楽の作曲家リゲティのピアノ曲を聴かせ、音楽と体の動きが連動すること体感させ、さらにそれをヒントにグループで話し合い、即興で曲を作らせています。その際、児童たちが、音楽の楽しさを実感できるようさまざまな工夫（ピアノとの一体感、体の動き、即興等）を行っています。「主体的・対話的で深い学び」を音楽という教科で実践した優れた研究だと思います。

お二人の受賞を心からお祝い申し上げます。

審査委員

## 東原 義訓



受賞された先生方、おめでとうございます。

今回の特徴はICT関係の論文の比率が多かったことです。一昨年は投稿論文の16%、昨年が14%、今回は21%でした。学習指導要領により、情報活用能力と小学校のプログラミング教育が、位置づけられましたから、予測はしていましたが、予測を超える投稿数でした。

要因は、全ての児童生徒に1人一台の情報端末と校内ネットワーク環境を整備するGIGAスクール構想と、新型コロナウイルス感染症対策のオンライン教育だと思われます。

GIGAスクール構想の実現に向けた論文の代表的なものは、小学校で奨励賞を受賞された吉田

康祐先生の実践論文でした。

GIGAスクール構想により、予想すらしていなかった情報環境が突然与えられることとなります。学校によっては混乱に陥るか、機器がお蔵入りしてしまうか、校長先生はじめ先生方のご苦労は多大なものだと思います。そんな中で、こうすればいいのですよと、安心感と期待感と勇気を与えてくれる論文が投稿されてきました。それが静岡市の吉田先生の実践記録でした。

6月時点で、クラス平均が1分間12文字だったキーボード入力技能は、タイピングソフトによる練習や、振り返り日記を毎日5分間かけてキーボード入力することで、10月には52文字も入力できるようになりました。キーボード入力技能を高めたことが、その後のICT活用の成功の秘訣となりました。

クラウドを活用することで、複数人が自分の端末から同じファイルに同時に入力したり、編集したりできます。児童は、この機能を活用して考えを共有したり、整理・分析したりする活動をしました。互いに関わり合いながら、主体的に取り組んだ様子が伝わってきました。

また、夏休みには、家庭に持ち帰った端末を活用して、離れていながらも話し合いが自主的に始まりました。さらには、委員会や係活動でのアンケート機能の利用など、教科以外でも幅広い活用が行われました。

これらを通して、「課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組むこと」や「自分の考えが上手く伝わるよう工夫して発表すること」ができる児童が増大したことがアンケートによって示されました。特に、児童に自由度を多く与えたことが、自ら考え、行動する児童を育てることにつながったのだと思います。

様々な点がGIGAスクールを目指す他校へ参考になります。この素晴らしい実践を推進された吉田先生に敬意を表したいと思います。

中学校区分で特別賞を受賞された中西一雄先生は、毎年、優れた実践論文を東書教育賞へ応募くださっています。

「生命」「物質」の理科の授業において、これまでの成果であるジグソー法を活かしつつ、反転学習に挑戦されました。家庭へ端末を持ち帰り、事前学習をします。その準備があるから、本番の授業では、生徒のアウトプット活動が促進されるわけです。検証の結果、問題解決力、協働する力、先を見通す力、伝える力の向上が見られたそうです。

私が注目したことは、事前学習した生徒がグループワークでの問いかけ役を担っている点です。検証の結果、知識・技能を事前学習した生徒は教える (teach) 上で能動的になっており、学習活動の流れや意識の在り方を事前学習した生徒は、指示する (coach) 上で能動的になっていると指摘されている点は興味深いところです。

教育関係の専門的な学会等で実践研究論文を投稿される近未来の中西先生のお姿を思い浮かべながら、私の講評とさせていただきます。

審査委員

藤井 齊亮



審査員の藤井齊亮です。

まず、全体的な印象を述べます。

小学校の部で最優秀賞となった論文のタイトルに「コロナ禍を乗り越える」という文言があります。まさに、それが象徴的だと思いました。実際、受賞論文の半数以上は、今年度の実践をまとめたものです。困難な状況の中で、なんとか

打開策を見いだそうとし、果敢に挑戦する先生方の姿が、論文に力強く表れていて、印象に残りました。

私のほうからは、二つの論文について講評と感想を述べます。

まず、中学校の部で奨励賞を受賞された北海道釧路市立幣舞中学校・高橋弾先生の「『見方・考え方』を活用した特別支援学級の理科授業実践と評価」についてです。

論文を読んでいると、高橋先生は理科教育については、豊富な経験と実力があることがわかります。実際、中学校理科教員として23年目ということです。ところが今年度は、通常の理科授業に加えて、特別支援学級の理科授業も担当されることになり、この論文は、その初めて担当した特別支援学級での実践をまとめたものです。

この実践では、学習指導要領のキーワードである「見方・考え方」に焦点をあて、「見方・考え方」の中でも「比較」を軸に物理・化学・生物・地学の4分野で実験教材を構成しています。「比較」とは要するに比べるということですが、その評価の視点を「相違点に気付くことができる」「共通点に気付くことができる」「共通点と相違点に気付くことができる」の3段階を設定し、評価の方法も個に応じて工夫されています。

改めて見直すと、極めて正当な教育実践といえますが、それをきちんとやり通したこと、そして、実践の成果を実証的に明確に示したことが高く評価されました。

もう一つは、小学校の部で奨励賞を受賞された愛知県安城市立桜井中学校の石川和幸先生の「地域の一員として主体的に防犯活動に取り組む子どもの育成」です。

石川和幸先生は、今年度中学校に異動されたということで、応募された実践は前任校の安城市立桜井小学校での実践です。論文の副題に「5年生総合的な学習の時間『よりよくしよう私たちの街 桜井』の実践を通して」とあるように、対象学年は5年生、教科・領域等の分類では「総合的な学習の時間」となります。

この実践は、「公園の防犯調査活動」「公園の安全マップづくり」「安城の犯罪傾向を見る」など全部で九つの活動で構成されています。実践の成果は、2名の抽出児童の記録からとらえていて、最初は防犯に対して他人事であった段階から、次第に防犯への関心・意欲の高まりや、実際の行動が変容していく姿を明らかにしています。

令和元年の犯罪発生の調査では、学校のある桜井地区の犯罪が大幅に減少したという成果も得られています。このことは、子どもたちの達成感を高め、自信に繋がり、地域を愛する心にも繋がったことと思います。

以上、全体の印象と、奨励賞を受賞された二つの論文について所感を述べました。ご紹介した二つの実践は、それぞれの教科・領域等において、全国の模範となる実践・研究であると思います。受賞、誠にありがとうございました。

審査委員

露木 昌仙



受賞された先生方、誠にありがとうございます。今年度から全面実施された小学校学習指導要領では「地域に開かれた」、「主体的・対話的で深い学び」、「カリキュラムマネジメント」等が改訂のキーワードと言われています。受賞されたどの論文においても、このことを意識し、改訂の要点を踏まえた実践となっています。その上で、改善の意図が明確であること、児童の主体的な活動を

促す方法が工夫されていること、他教科等との関連を図る工夫がなされていること、具体的な成果の検証がなされていること、などどれも優れた論述となっていました。また、昨年度末からの緊急事態宣言等による学校の臨時休校などにより、通常以外の多くの対応に迫られた中にもかかわらず、前向きにとらえ、このようなときだからできる手作り教材を作成したり、ネットを用いた指導を工夫したりする様子も見られました。ご苦勞の多い中であっても、よりよい授業を作りたいという皆様の思い、熱意は素晴らしいと感じました。

さて、令和2年度までの5年間の全国の公立小学校の児童数及び学校数の推移をみますと、児童数は240,580人減少、学校数は1,232校減少（平成27年学校基本調査及び令和2年度学校基本調査速報値による）しています。小学校で奨励賞を受賞された、愛知県岡崎市立生平小学校においても10数年で児童数が半減し、「昭和の時代から続いてきた愛鳥活動の規模を縮小せざるを得ず、子供たちの活動にも低迷が見られた」と、伊奈良晃先生はおっしゃっています。学校の伝統と言われてきたにもかかわらず、低調な状況に対する伊奈先生の忸怩たる思いが伝わってきます。愛鳥活動を復活させたい、これまで以上に発展させ、愛鳥を学校の伝統から学区の文化へと高めたいという強い思いを感じます。この実践のとりわけ優れている点は、①子供たちに十分考えさせ、子供たちの考えを活かして進めていること、また、②独りよがりにならず保護者や地域や専門家の方々の協力や意見を取り入れ進めていることです。①では子供たちの意見に基づき野鳥ギャラリーを改善し、ウォッチングカード（観察カード）を発達段階毎に改め、活動のための時間を確保しています。②としては保護者や地域の人たちとの連携、各種発表大会への応募やそのことに関連するメディアでの紹介、県内他市の学校との交流、大学・企業・野鳥の会など有識者との連携など多くの方々と関わり、地域に開かれた実践としていることです。

愛鳥活動を通して、子供たちの意識を高め、

地域を愛する心を涵養している。とても素晴らしいと感じたところです。子供たちの気づきの変容、環境意識や地域に対する思いなどの変容の状況等をデータ化して示してあると論文としての価値はより高まったように思います。しかし、少人数の中での取り組みですので難しかったとも感じているところです。「バードピア生平」がずっと活用され、愛鳥の心が生平学区の文化となることを期待しています。

審査委員

壺内 明



「東書教育賞」を受賞された先生方、おめでとうございます。私からは、中学校の部の全体的な感想と奨励賞の京都市立大淀中学校の八日市律子先生の教育実践研究について講評並びに感想を述べさせていただきます。

中学校は、小学校に続いてこの4月より全面实施されます新学習指導要領の目指すべきねらいに向かって、先進的に取り組んだ実践研究がほとんどです。今回の改訂は、「何を学ぶか」という内容より、「何ができるようになるか」、「どのように学ぶか」という能力の育成を目指しています。そのための目標として、学習活動で育成されるべき資質・能力の三つの柱、①知識及び技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力と人間性等が掲げられました。

各先生方の研究テーマ、「探究的な学びを通し

ての資質・能力の育成」や「科学的に探究し、学ぶ意欲や価値の実感」、「見方・考え方を活用した授業」などの表題は、まさしく2030年に向けての流動的な社会をたくましく生きていく上で必須とされる資質・能力であります。研究内容についても、生徒の探求心や知的好奇心を育成するため、地域の人々や郷土の自然を教材化するなど、地域教材の開発と指導法の工夫をして、子供たちが思う存分考え、これからの時代をたくましく生き、未来を創造できる育成を図っている優れた実践研究であります。

奨励賞の大淀中学校の八日市先生の実践研究は、技術・家庭科の家庭分野で、テーマを「SDGsを通して社会を、そして自分自身を見つめる子どもの育成」と設定して実践研究に取り組みました。SDGsは、「持続可能な開発目標」の略称で2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟国193か国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた目標です。学習指導要領では、その文言が「持続可能な社会の創り手の育成」と明記され、特に、社会科や理科、技術・家庭科などで「持続可能」という言葉で多く使われています。

八日市先生の研究は、家庭分野での新しい課題にチャレンジした素晴らしい先駆的な実践研究であります。SDGsの17の目標をコロナ禍の中で大変なご苦労をなさって、わかりやすく学べる手作り絵本やカード教材として完成させました。授業での読み聞かせ活動や対話的な活動を実践する上で、短期間に自作教材の開発を製作した成果は計り知れないほど大きな価値があります。

先生の作成した絵本やカード教材は、読み聞かせ活動や対話的な活動を促すのに最適な自作教材になっています。将来、子供たちが社会人になって多分野にわたって活動できる基礎・基本となる素晴らしい教材開発であります。また、地域の保育園でも読み聞かせ活動を展開していることは、自作の教材が高く評価されている証です。さらにSDGsに関して「生徒自作絵本」や「生徒

自作カード教材」まで発展させていることは、子供たちの思考力・判断力・表現力を培い、学びに向かう力の育成に効果的な教材になっています。「エシカル消費」の絵本や「消費すどろくカード」などの手作り教材で学習意欲を高めていることも大きな成果であります。学習後の生徒意識調査の結果からもエネルギー環境問題やエシカル消費についての現状や課題について、かなり具体的な文章表現が多くなり資質・能力の三つの柱の育成に多大なるよい影響を与え、今後の成長ぶりが楽しみになったことは大きな収穫と言えます。

どうぞ、今後とも継続して、このような教育実践研究を続けられますよう期待しております。おめでとうございました。